

じょう 城 ノブ (1872~1959)



社会事業家。温泉郡川上村(現、東温市)出身。松山藩医だった城謙三と千代の次女として生まれる。明治23(1890)年、四国初の女学校でミッション・スクールでもあった松山女学校(現、松山東雲学園)に入学。キリスト教の教えに感銘を受け、在学中に許しを得ずに洗礼を受けたため父から勘当をされたが、初志を曲げずに親元を離れて神戸の職業学校で教師となる。明治26(1893)年、聖經女学校(現、青山学院)に入学、卒業後は青森県の弘前を皮切りに全国各地を伝道のために奔走する。大正元(1912)年、同郷の寺島信恵から援助の要請を受けて神戸養老院(現、神戸老人ホーム)へ赴く。その頃、神戸の須磨沖で若い女性が子どもと心中する事件が起き、その報に心を痛めてひたすら祈り続けたノブは、「苦しむ女性たちを救え」との神の啓示を受け、個人事業として我が国初の女性救済施設「神戸婦人

同情会」を大正5(1916)年に創立した。会の活動が注目されたのは、自殺の絶えなかった兵庫県の須磨海岸の線路沿いに立てられた「一寸待て。神は愛なり」の自殺防止の救命看板であった。所在地や電話番号まで書かれた看板を見て自殺を思いとどまり、同情会の門をたたいて命を救われた人は20年間で約3,000人とも言われている。

略歴

明治5(1872)年10月18日	温泉郡川上村に生まれる。
明治23(1890)年2月	松山女学校に入学
6月8日	デュクス宣教師より洗礼を受ける。キリスト教徒となったことで父より勘当されたため神戸へ転居し、職業学校の教師として生活を始める。
明治26(1893)年4月	聖經女学校神学部へ入学
明治28(1895)年3月	聖經女学校卒業、伝道師の資格を得る。卒業後は青森県の弘前を皮切りに全国各地を伝道のために奔走する。
明治42(1909)年9月	静岡ホーム(孤児院)の要請により、同施設に教師兼保母長として赴任
大正元(1912)年8月27日	神戸養老院の創設者・寺島信恵の要請により、同施設に赴任
大正4(1915)年12月	六甲山脈に連なる摩耶山麓に三日三晩籠って神に祈り“啓示”を受ける。
大正5(1916)年3月5日	女性救済施設「神戸婦人同情会」を創立
大正6(1917)年3月	「一寸待て。神は愛なり」の自殺防止の救命看板を設置
大正12(1923)年9月1日	関東大震災発生。救援物資(特に衣料品)の寄付を募り被災地へ輸送
昭和2(1927)年3月	北丹後地震発生。保育士、看護師を連れて北丹後に臨時託児所を開設し、復興に携わる親たちの支援をする。
昭和15(1940)年10月10日	藍綬褒章受章
昭和20(1945)年6月5日	神戸大空襲により全施設が焼失
昭和22(1947)年4月	尼崎で戦後最初の保育所となる園田愛児園を開所
8月	神戸事業所の焼失地に母子寮と保育所「青谷愛児園」を再開
昭和31(1956)年10月28日	昭和天皇御夫妻が、神戸婦人同情会の社会事業を御視察のために行幸
昭和34(1959)年12月20日	87歳で永眠、同日勲五等瑞宝章を受章

〈関連図書〉

- ・城一男著・城泰子編『マザー・オブ・マザーズ 社会事業家・城ノブの生涯』 文芸社 2003年
- ・『神戸婦人同情会90周年記念誌』 社会福祉法人神戸婦人同情会 2006年
- ・梨畑麦秋『山河遙かに-城ノブ尋究の旅-』 清風堂書店 2006年
- ・『城ノブ没後50年記念』 社会福祉法人神戸婦人同情会 2009年
- ・澤美晴『城ノブ物語 一寸待て、神は愛なり 伝道師から社会福祉事業の道へ』
神戸新聞総合出版センター 2012年

〈主な収蔵資料〉…(P211, 72~73)

〈ゆかりのある場所〉…(P290, 105~106)